

中国の習近平国家主席は三期目に突入し、権力を盤石にしたようだ。中国は多民族国家で、中国政府が弱小民族を差別、抑圧しているというニュースを絶えず聞かされている。国連は検証したいが、内政不干渉と言われ、正確な調査ができず、少数民族が置かれた状況は明らかにされていない。サウト・モハメド氏が『ウイグル人と民族自決 全体主義体制下の民族浄化』を著している。彼は1977年、東トルキスタン（新疆ウイグル自治区）で生まれ、ある事件を契機に出国を決意し、2016年に来日した。徳島大学大学院を修了、現在、日本ウイグル協会の理事をし、ウイグル人の人権活動などに取り組んでいる。

本書は、徳島大学で研究を重ね、同大学院に進学し、2021年に修士の学位を取得し、その学位論文を出版したものである。5年間で、これだけの論文をかけるほど、日本語を習得しているのには驚きである。ウイグル問題を歴史的、政治的、法的な観点から、多角的に網羅して記述している真摯な姿勢に敬服する。彼は「私は中国に戻れば、間違いなくすぐ拘束されます。故郷にいる家族に連絡もできません。日本以外に行くところはありません」と言っている。直接的な被害者であるから、主観的、感情的な悲しみ、怒りがあるだろうが、客観的、冷静に論述している。A5サイズの本で、本文は260頁くらい、注と参考文献一覧が50頁もある。メディア受けを狙って、煽って書いたものではなく、密度の高い学術論文である。ウイグルの歴史、中国の民族政策、ウイグル自治区の現状、民族自治の法的概念、ウイグルの未来への展望などが丁寧に記述され、ウイグル人が置かれている現状を知ることができる。「ウイグル自治区の現状」を中心に紹介したい。

ウイグルは、中国から圧迫を受け続けてきたが、習近平政権になってから、一段と過酷になった。1200もの収容施設を建設し、80万人から200万人以上が、強制収容され、中国同化政策の再教育が行われ、そこでは、虐待、拷問があると報告されている。血液、指紋、DNAのデータが収集され、臓器移植の準備であるとの疑いもある。ウイグルは綿花の供給地で、ウラン、石油なども埋蔵され、これらの労働に駆り出され、強制労働による死者が多数出ている。出産が制限され、人工妊娠中絶や不妊手術が行われ、民族の人口を抑制する政策が取られている。ウイグルには多宗教があるが、イスラム教徒が最も多い。彼らを「過激派」という口実で弾圧を正当化している。言語に関しても、漢語教育を推進し、中華民族としてのアイデンティティを身に付けさせようとしている。漢民族が入植し、ウイグル人を凌駕するようになり、ウイグル人の文化、人種的希薄化を図っている。中国は膨大な人口をかかえ、近代化が進み、地下資源が大幅に不足するようになり、ウイグルから農作物を収奪し、恵まれた諸々の地下資源を大規模に採掘している。また、中国はウイグル自治区のロプノールで、46回の核実験を繰り返した。核実験で汚染されたリスクのある土地で暮らさざるを得ない状況にある。漢人とウイグル人の経済格差は32倍とも言われるほどである。「中華思想」を強力に推進している訳である。本書の「帯」には「絶望的状况」「ジェノサイド（民族の破壊）」という言葉で、ウイグルの現実を捉えている。

民族自治権はおろか、人権、生存権さえ保障されていない。モハメド氏は、ウイグルには「カリスマ性を持つ指導者は不在だし、チベット亡命政府のような機能する中心的組織もないのである。したがって、現在のウイグル人は、粘り強く非暴力抵抗運動を継続し、反体制組織の統一を作り上げ、中共が動揺、崩壊する時の混乱に備えるのが取るべき方策である」と締めくくっている。その日がいつ来るか。気の遠くなるような忍耐が求められる。ウイグル人と連帯しようがないが、実情を知ることには益があると思いたい。